



「知っているようで知らない  
『お天気』の本」を読んで

●年 ● ● ●

ある日曜の午後でした。公園でお父さんと遊んでいたら、真っ黒い雲が出てきました。ゴロゴロゴロゴロ、遠くで雷の音が聞こえました。急に雨が降ってきました。お父さんとわたしは急いで雨宿りをしました。

「お父さん、どうして雲の色は黒いの」

「どうして黒いんだろうね：：」

「工場の煙で汚い空気が雲を黒くしているのかな。車から出る黒い煙のせいかな」

「どうなんだろうね：：」

何か悪いことを聞いたと思いました。すごく気まずい雰囲気になりました。

ある日、お父さんが

「雲が黒いのはね：：」

黒い雲の話を始めました。わたしは黒い雲のことをすっかり忘れていました。しかし、お

父さんは気にしていたようです。  
 それから天気のことについていろいろと教  
 えてくれるようになりました。お父さんはお  
 天気博士のようです。  
 ある日お父さんの部屋に入りました。机の  
 上に一冊の小さな本が置いてありました。表  
 紙には「知っているようで知らない『お天  
 気』の本」と書いてありました。  
 お父さんが部屋に入ってきました。  
 「あっ、ばれちゃったね」  
 笑いながら言いました。お父さんはこの本を  
 読んでいろいろとわたしにお話をしてくれて  
 いたのです。  
 「この本は難しい言葉を使っていないから、  
 ●●なら読めると思うよ。読んでごらん。わ  
 からない漢字や言葉は教えてあげるから」  
 そう言っていて、わたしにその本を渡してくれま  
 した。  
 お父さんが「読んでごらん」と言った本で  
 す。きつとおもしろいことが書いてあるはず

です。部屋に戻ってすぐに読み始めました。  
 この本でわたしが特におもしろいと思った  
 のは、「天気予報の言葉」です。天気予報を  
 見ていてよくわからないときがあります。た  
 とえば「平年並みってどういう意味なの」  
 「晴れときどき曇り」と、晴れ一時曇りってど  
 う違うの」「注意報と警報って何が違うの」  
 など、小学〇年生のわたしでもわかるように  
 書いてあります。それから天気予報を見るの  
 が楽しみになりました。  
 お母さんと天気予報を見ていたときです。  
 「一ミリの雨ってどのくらいと思う」  
 「雨の落ちる早さってどのくらいだと思う」  
 と、本を読んで覚えてことを話したくてしか  
 たありませんでした。  
 「それ、前にお父さんが買ってきた本に書い  
 てあったことよね。やっぱ親子なんだね」  
 そう言っていて、わたしの質問に全部答えまし  
 た。お母さんも本を読んでいたんだ、やっぱ  
 りわたしたちは親子なんだ、そう思いました。